

二次入学試験問題

【国語】

時間 50分

【注意】

- 1 試験開始の合図があるまで、中を見てはいけません。
- 2 問題は13ページまであります。試験中に汚れや不足しているページに気づいた場合は、手をあげて監督かんとくの先生を呼んでください。
- 3 問いに字数指定がある場合には、句読点なども一字分に数えます。

受験番号	氏名

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

マノロの父ファン・オリバルは十二歳の時に闘牛士としてデビューして以来、その勇気と美しさと技で人々を魅了した。しかし、二十二歳で牛に胸を刺され死んでしまう。ファンの死後、町の中心の広場には彼の銅像が建てられ、博物館もつくられた。マノロは初めて闘牛に挑戦する日をむかえ、伯爵とアルフォンソ・カステイリヨと対面した。

〈本文に登場する人物〉

アルフォンソ・カステイリヨ……闘牛の評論家

伯爵……マノロ父子の熱心な支援者

ファン・ガルシア……闘牛士になりたがっているマノロの友だち

エミリオ・ファレス……闘牛士

〈本文に登場する闘牛関連の語〉

ケープ、ムレータ……ともに牛の動きをあやつるために使う布で、特にムレータは闘牛の試合の最後に使われるもの

ファエーナ……闘牛の試合の最後に剣で牛にとどめをさすこと

パス……牛を引きつけてやり過ぎす闘牛士の動作

ナトゥラル、デレチャーン……ともにパスの技の一種

「さあ、おはいり。」アルフォンソ・カステイリヨが、書斎のなかに車いすを進めるのを見て、伯爵がマノロにいった。「わしがドアをしめよう。」

ドアがしまると、へやのなかはくらかった。伯爵は、窓に歩みよってカーテンのひもをひいた。カーテンが両側にひらくと、光のたばが、だんろと、その上の一枚の絵を照らした。マノロは、おどろいて息をのんだ。そこには、マノロとうり二つの少年が描かれていた。

「これは、この牧場で、はじめて牛と戦ったときのおまえのおとうさんだ。」と、伯爵はいった。「絵かきが、記憶でかいたも

のだが、みごとな絵じゃ。」

「おまえのおとうさんが、牛のからだにどんなに近いかなどということに感心するな。」と、カステイリーヨが、車いすを絵に近よせながらいった。「ムレータで牛をみちびいているすがたのよさに感心してもいけない。おとうさんの顔を、じっと見てごらん。顔になにかかいてある？」

マノロは、絵の少年の顔をじっと見あげた。その顔は、鏡で見た自分の顔ではなかった。しんけんさ以上のなにか、神経を集中している以上のなにか、悲しさ以上のなにかがあった。

「あの顔は、」と、マノロは、ゆっくりいった。「おとなになりつつある……少年の顔です。」

「そのとおり、よくいった！」カステイリーヨの声は、マノロのこたえを誇らしく感じていたようだった。「まさにあの瞬間に、おまえのおとうさんは、子ども時代をぬけだしていったのだ。そして、十二歳のときに、それをよろこんでやったのだ。ひとりの闘牛士になったばかりか、男として責任をもちはじめたのだ。」

① 伯爵は、反対側の壁を指さした。

「これがその日、おまえのおとうさんが殺した牛の首じゃ。」

大きな黒牛の首が、マノロを見おろしていた。つのは、長くするどく、見ひらいた目は、ガラスだまのようにひかっていた。ものすごく大きい。「パタテロ」の首に負けない大きさと、マノロは思った。だが、その目はちがった。父を殺したパタテロの目のようにただけしくなかった。

「あの牛の名まえは、『カスタロン』だった。」と、伯爵はいった。「きょうのおまえの牛は、『カスタロン二世』という名だ。あの牛とおなじように、みごとな牛じゃ。そして、あの牛とおなじ運命が待ちうけている。偉大な闘牛士による、みごとな殺しの瞬間がな。」

マノロは、伯爵が、マノロのこたえを待っているのを知りながら、床に目をおとした。全力をつくします、というマノロの自信にみちたこたえを待っているのだった。だが、なんのことももてこなかった。

「しばらく、ふたりだけにさせていただけませんか？」といったのは、カステイリーヨだった。

マノロは、伯爵が書齋をでていくのを、目をあげて見なかった。しかし、アルフォンソ・カステイリーヨが話しはじめると、

その顔を、じっと見た。

「勇敢な牛の運命は、気高い戦いによる、気高い死以外のなに物でもあってもいけない。だが、それは、人間の運命とおなじではない。人間は、戦う牛とはちがうのだ。人間の一生は、戦うことだけではない。あたえることも、愛することもある。人間の一生は、さまざまだ。人間は、おとなになるまえに、えらぶべきことがたくさんある。正しいこと、まちがったこと。自分だけを満足させるか、ほかの人びとをよるこぼすか。自己に忠実か、自己をあざむくか。」

朝、目をさましてからマノロは、いまはじめて、現実なことばがきこえ、ものが見える思いがした。それは、恐怖心が、かれのからだから消えたのではなく、まだ、それは、からだのなかにひそんでいたが、自分自身の心がうごきはじめたからだだった。マノロは、カステイリヨのさいごのことばを、自分にくりかえした。母が、父のことを話したとき、ほとんどおなじことをいった。

「なぜ、わしが、おまえのとなりに立たずに、この車いすにすわっているか、ほんとうのわけを知っているのは、おまえのおとうさんだけだ。」

アルフオンソ・カステイリヨの声は、もうあらあらしくなく、やさしかった。

「十年ほどまえのこと、わしの批評によって闘牛士としての生命をだいなしにされたという、ひとりの闘牛士が、わしに、牛と戦ってみろといった。わしは、かれのいうことを、わらいとぼすこともできた。たしかに、はじめは、そうした。そして、わしは、その挑戦を、理性が拒絶したのか、おくびような心が拒絶したのか、自分をうたがった。わしは、そのこたえを見いだそうと、牧場に車を走らせた。そして、自動車は、事故にあった。

わしが、牛にむかって車を走らせているときにしようじた恐怖心、それが事故をおこさせたのだ。牛と一対一で対決することを考えているうちに、その恐怖が、どれほどすさまじいものかに気づいたのだ。

闘牛士たちのことを書きながら、かれらが、つのに刺され、けがをし、死ぬことをおそれることを、わしは知っていた。そして、その恐怖心を克服し、自分の心から恐怖心をはらいのけ、それをわすれて闘牛をやることのできるかれらは、勇敢な男たちだと考えてもいた。そして、その日、わしは、それを身をもってためそうと思ったのだが、自動車事故のためにできなくなった。

だが、その日、わしは、いろいろな状況で、さまざまなおそろしいことであつてきた。そして、そのとき、わしは、勇気とは、ただおそれないということとちがうということが、わかるようになった。ほんとうの勇気、真の勇気は、おそれがあ

り、おそれを知って、しかも戦うことだ。」

アルフォンソ・カステイリーヨは、ファン・オリバルの肖像画を見あげながら話しつづけた。そして、やっとマノロの顔を見た。

「わしは、自分の話をするつもりはなかったのだ。おまえに忠告しなかったのだ。おとなはいつも、そんなことをする。おとなの仕事の一つと思っているからだ。他人に、おまえのすることを、きめさせるな。もし、おまえが、自分に正直なら、自分ですることは自分できめなさい。だいじなことはだよ。自分にとつてだいじなことはな。」

わしは、おまえのおとうさんを、よく知っていた。おとうさんが、友だちと考えた人のだれよりも、このわしが、おとうさんのことをよく知っていただろう。おとうさんが生きていけば、おまえは、けっしてここにこなかっただろう。おとうさんには、おまえが、おとうさんそのままではないということが、よくわかっただろうし、おまえにも、それがわかっただろう。おまえが闘牛士になりたがっているとは、わしは思わぬ。おまえが、おとうさんとおなじだとは、わしは思わぬ。おまえは、おまえ自身になりなさい。まだ、自分がどういう人間なのかわからぬのなら、わかるようになるまで待ちなさい。ほかの人間に、おまえがなんなのか、きめさせてはいけない。

おまえの知っているファン・ガルシアという少年は、闘牛士になるためなら、なんでもやる少年だ。」

「ぼくも、顔を見たときにそう思いました。」

カステイリーヨは、マノロが、ほかになにかいうかと待った。だが、その必要はなかった。② マノロは、長いあいだ、自分が負いつづけてきた重荷が、そして、自分におもくのしかかっていたなにかが、とつぜん、とりさられた思いだった。また、狩りの服装をして自分を見にきた人びとは、狩りの儀式に出席するのだということにも気づいた。だが、かれらがえものをほふるのではなく、自分が、その役目をするのだった。

「ありがとうございます。」と、マノロは、心から感謝していった。「カステイリーヨさん、おかげで決心がきます。」

「その決心が、どうあるうとも、わしは、それが正しいと信ずるよ。」アルフォンソ・カステイリーヨは、マノロの手をにぎりしめながら「マノロ、よくおぼえておきなさい。」と、いった。「すべて、神とおまえとの約束なんだよ。」

書齋をでるまえに、マノロは、父の顔を見あげた。そして、きょう、自分も、おとなになるのかもしれないと思った。

【中略】闘牛場でマノロは牛を相手に見事なパスの技をくりひろげ、観客から拍手喝采はくしゅくさいをうけた。後はファエーナを残すのみである。

「みごとだ。」エミリオ・ファレスがいった。「みごとだったぞ。」

エミリオは、木の剣とムレータを、マノロに手わたした。赤い布のムレータの下に剣をすべりこませながら、マノロの手がふるえた。マノロは、それが気にいらなかった。そして、手のふるえに、エミリオが、気づかなければいいがと思った。

「りっぱなファエーナを見せてやれ。」

エミリオが、マノロの背中をかくたきながらいった。

ナトゥラルとデレチャソのつづけわざをやる。それだけをうまくやろうと、マノロは考えた。だが、ひざから力がぬけていた。リングへ走りでると、ひざが鳴るようだった。ムレータを使うむずかしさを思いだした。ムレータのパスは、ひじようにむずかしいものだった。一度も、自分で満足したことはなかった。夜ごとの練習では、けつしてうまくいかなかった。こんどこそ、はつきりとわかるだろう。

カステイリヨさんと話して決心したとおり、こんどこそわかるのだ。もし、うまくできれば、闘牛士になろう。人びとがそのぞむからではなく、自分がのぞむからだ。しかし、牛と戦ううち、これは自分ののぞむことでないとわかったら、それを、みなにはつきりというのだ。自分ののぞみでないことに、他人の意志でおしまれることはやめるのだ。

マノロはためさなかったとは、だれにもいわせない。そしてマノロ自身、ほんとうの勇氣があることがわかるのだ。

「エー、トロ（こい、小牛）！」

マノロは、さけんだつもりだったが、かすれ声しか、でてこなかった。

「エー、トロ！」

もう一度、大声でさけびなおした。声はでたが、ケープを使ったときののように、よろこびにみちた声ではなかった。

牛のうごくにつれ、マノロは、剣をもつ手をかえようとした。左手よりも右手のほうがいいだろうと思った。もつと距離きょりが必  
要だと思ったが、すでに牛は、目前にせまっていた。マノロは、パスをやらずに、とびさがった。と、ムレータは、いつのまにか手をはなれ、はげしく上下する牛のつのかかっていた。エミリオ・ファレスがとびだし、つからムレータをとり、マノロにむかってさけんだ。

むだだ、とマノロは思った。そして、氣力をふりしぼり、つかれた足をエミリオのほうへ進めた。いまからは、もう観客をこまかすことになる。マノロには、それが、はつきりとわかった。マノロは、自分のできることは、自分に証明してみせた。だが、さいごのファエーナは、うまくできなかったのだ。闘牛士には、なりたくない。

牛がかれにむかってばく進してきた。マノロは逃げなかった。だが、デレチャーンソのパスは、ほんのおざなりだった。牛はすぐ攻撃にうつった。マノロは、かまえないおすひまもなかった。かろうじてマノロがやったことは、片手を不器用にうごかすことだけだった。そのうごきにさわられ、牛は、地面にむけて、首を苦しそうにねじまげた。

③ いまこそ決心するときにきた。このまま観客と自分自身をごまかしつづけるか、あるいは、やるべきことをやるか。かれは、正面の席のま下にいた。マノロは、伯爵を見あげ、つづいて、カステイリーヨを見た。そして、マノロは、カステイリーヨにむかっていった。

「ぼくは、この勇敢な牛と戦いません。」その声は、マノロ自身の耳にもききなれない、力づよい大きな声だった。「ぼくは、父とちがいます。闘牛士になりたくありません。」

「マノロ！」そういったのは伯爵だった。「おまえのケープは、みごとだったぞ。ムレータは、もうすこし練習が必要かもしれないが、きつとできるぞ。マノロ、つづけるんじや。りつばな闘牛士になれるぞ。」

「いいえちがいます。」マノロには、はつきりとわかった。「もし闘牛士になれば、ぼくは道化役の『偉大なる闘牛士』のようになるでしょう。しかも、かれには熱情があるのに、ぼくにはありません。ぼくは、あなたをだましたくないから、これ以上やりません。あなたは、きよう、ここへ、新しい闘牛士の誕生を見にこられたのでしょうか。ぼくの父のようにりつばな闘牛士になれる少年がいます。名まえもおなじファンです。」

マノロは、伯爵のゆるしもえずに、ファンのほうに数歩進んだ。

「ファン、これは、きみの牛だ。」

「だが、マノロ……」と伯爵は、反対しかけた。そしてカステイリーヨを見、またマノロを見て、ぎごちなくいった。「まあいいだろう、その少年にやらせる。」

リングにとびだしたファンのほほに、涙が流れていた。マノロには、ファンの顔が、ぼやけて見えた。目にうかんだ涙のためだった。

マノロは、六人の男たちのほうを見た。かれらの顔は、いかりと失望にゆがんでいるにちがいない。そうだったかもしれない。だが、それはもう消えていた。リングにとびだしたフアンを、六人の男たちは、息をとめて見つめていた。

フアンは、ナトゥラルの連続わざで、みごとに牛をみちびいていた。六人と、ほかの観客のすべては、総立ちだった。

「オレー！」の歓声かんせいが、かこいのなかにこえました。

マノロは、あいた席にむかって、ゆっくりと歩いた。老医師が、すわるように手まねきした。

「これで、」と、老医師が、ぼそりといった。「おまえも、学校の帰りに、わしの診療所しんりょうじょを手つだう時間ができるじゃないか。助手がいるんじゃないよ。」

「おねがいします。」

「おまえは、わしを、だまさなかったわい。」そういうと、老医師のしわだらけの顔に、はじめてわらいがうかんだ。「闘牛士にむかんことは、わしにはわかつつたよ。だがな、あるとき一度おまえにあつたきりじゃが、おまえは、いい医者になれそうじゃと思つとつた。そう思わんかね？ わしは、おまえをたすけるつもりじゃ。」

「はい、ぼくもそう思います。」

ほんとししばらくぶりに思われたが、マノロは、心からほほえんだ。

「床みがきをしたり、湯たんぽをあらつたりせず、すぐに医者になれると思つちやいかんよ。おまえが、はじめにやるのは、そういうことじゃ。まなぶのには、時間がかかる。たいへんなことなんじゃよ。」

「はい、かくごしています。」

そこで心のかようふたりは、だまってフアン・ガルシア、十四歳と、「カスターロン二世」の戦いを見つめた。ここでは、新しい闘牛の歴史がつくられていた。それを見つめながらマノロの顔に悲しみがたどつたが、それは、ねたみではなかった。<sup>④</sup> 黄色い砂の上につくしい光景が展開されているのに、自分がそのうつくしさの一部となれない悲しみだった。

しかし、ねたみではなかった。マノロは、自分の人生の道をえらんだのだ。そして、父の生涯しやうがいだった闘牛は、これまでと同じように人生の一部としてマノロとともに生きつづけていく。だが、だれも考えなかった、べつの道で。



問一 — 線部① 「伯爵は、反対側の壁を指さした」とありますが、このときの伯爵の気持ちを説明しなさい。

問二 — 線部② 「マノロは、長いあいだ、自分が負いつづけてきた重荷が、そして、自分におもくのしかかっていたなにかが、とつぜん、とりさられた思いだった」とありますが、これはマノロのどのような心情の変化を表していますか。変化したきっかけもふくめて、八十字以内で説明しなさい。

問三 — 線部③ 「いまこそ決心するときがきた」とありますが、この時のマノロの心情を、そのように思ったきっかけもふくめて説明しなさい。

問四 — 線部④ 「黄色い砂の上につくしい光景が展開されているのに、自分がそのうつくしさの一部となれない悲しみだった」とありますが、これはどのような「悲しみ」ですか。具体的に説明しなさい。

問五 — 線部⑤ 「マノロは、自分の人生の道をえらんだのだ。そして、父の生涯だった闘牛は、これまでと同じように人生の一部としてマノロとともに生きつづけていく。だが、だれも考えなかった、べつの道で」とありますが、これはどのようなことですか。具体的に説明しなさい。

## 二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ある程度の年齢に達した人にとって、俳句ほど良い趣味はないでしょう。

一般的に、まだ仕事をしている現役世代は、モノを学ぶ、知るところまで手が回りません。実際には、仕事を離れ、まとまった時間が自由に使えるようになって初めて、モノを作るという喜びに心底浸ることができる。そして、そのとき、モノを作る喜びを最も手軽に満足させてくれるのが俳句ではないか、と思うのです。

ただし、だからといって俳句作りそのものを軽い気持ちでやっているといいのかといえ、そうではありません。手軽な俳句作りを推奨するわけではないのです。中高年の方はこれから俳句を始めるにあたって、むしろ重い俳句を作ろうと心掛けるべきです。

本当に骨身を削って、呻吟しながら、句作に励んでいけば、そんなにたくさん作れるはずがない。俳句は見かけこそ簡単ですけれども、中身は相当やっかいなものです。苦勞して、苦勞して、そのやっかいさを克服することができれば、自然とモノの見方なども変わってきます。十分に時間をかけて、月に三句から五句作るぐらいがいいでしょう。芭蕉が「舌頭に千転せよ」と言っているように、俳句が本当に俳句らしい力を持つためには、やはり作って、寝させて、推敲して、また寝させて、ということをやり続けなければならないのです。

そもそも俳句は、なまけものの文芸です。省略に省略を重ねて、わずか十七音から成立するこの短詩型ほど、言語の経済原則に忠実に則った詩学は世界に類がありません。

ただし、うまくなまけるのは働くより難しい。うまくなまけるためには人知れぬ苦心がいりますし、技法がやかましく言われるのも当然です。なまけものはじつと坐っていないくはないけない。まったく新しいものを不用意に持ち込んだりしては、俳句の詩学は崩れてしまいます。なまけものには着慣れた着物を着せておく必要がある。季語は古着だから、新しい服と取り替えよう、などというわけにはいかないのです。つまり、私が強調したいのは、<sup>①</sup>俳句そのものはなまけものの文芸であっても、俳句を作る者はなまけものであってはならないということなのです。

私の好きな俳人に、滝瓢水たきひょうすいという人がいます。江戸中期に播磨はりまの国に生まれた人ですが、豪商ごうしやうの家の出で相当な財産を引き継いだ。ところが、風流の道を極めんとしたためにどんどんその財産を減らしてしまい、晩年は相当貧しい暮らしを強いられるようになってしまったようです。それでも最後まで飄々ひょうひょうと人生を楽しんだと言われている、ある種奇人きじんとしてのエピソードには事欠かないのですが、その実、人となりについてあまり詳しいことは分かっています。その瓢水に次のような句があります。

濱はままでは海女あまも蓑みの着る時雨しぐれかな

海女さんは海に入ってしまったえびどうせ濡れてしまわうわけです。だから、時雨が降っていたって気にすることはあるまい。浜に行くまでに濡れてしまったって構わないだろう——。人はややもするとそう考えがちですが、そうじゃない。

私はこのごろ、人間は生まれながらにして死刑囚しけいしゆうなのではないかと思うようになりました。執行しつこうの日が決まらないから、のんびり構えている人もいるし、浮かれている人もいます。

しかし、誰だれにでも執行の日は必ず訪おとずれるのです。

この句の「濱」を「死」と捉えれば、人間、やはり死を迎えるその日まで、いい加減な生き方をせずに、きちんとすべきことをし、自分を労ねぎほわなければいけない、と解釈できる。哲てつ学がく性、宗しゆ教きやう性を帯びている一方で、なんともいえぬ軽みもあるじやないですか。

蔵売くらうりって日当りのよき牡丹ぼたんかな

② この句は、要するに一種の価値転換てんかんを図はかって見方を変えれば、世の中はまったく違ちがって見えますよ、と言っているわけです。瓢水自身、実際にそれに近い経験をしたらしいのですが、自分を見事に客観化きゃくくわんかしています。

今、瓢水のことを評価する人はほとんどいませんが、この人は、実は芭蕉ばしやうでさえ到達とうたつできていない境地に達し得たのではないかと私は思うのです。芭蕉はどちらかといえば自分を客観視するというよりも、自然の中に自分を投影とうえいしていますね。

これから俳句を始める方には、どうせなら瓢水のような句を作っていたいただきたいものです。

二十年以上も前に私が出版した『思考の整理学』という本が、なぜか今、再び評判になっているそうです。この本は、考えることの楽しさを述べたものでした。

もちろん、今でもその考えに変わりはありませんが、最近はそれに加えて「忘却」もまた大切であることを痛感しています。とくに、俳句作りに関していえば、歳を取ったら、あまり過去を振り返らない方がよいのではないかと思えます。来し方を振り返るのではなくて、過去を乗り越えて、これから先を生きていく。今の時点において自分が面白いと感じたものを句にしていこう。

だいたい、過去を振り返ると、ついつい愚痴になったり、自慢話になったりしますから、それはしない。③ 人生を整理するといつても、整理自体が目的なのではなくて、あくまで新しいものを生み出すための手段としての整理をするということなのだと思えます。整理がうまくできないとゴタゴタして新しいものが生み出しにくいでしょう。

それにはまず自分というものをやや厳しく辛い目で見るのが肝要です。そのうえでの整理というのは、大半のことを忘れるということですが、忘れて、忘れて、それでも忘れきれないものが必ずあるはずですが、それだけを基礎にしてもう一回新しい生き方を模索していき。

今まではおおむね人生一毛作で済んだわけですが、これだけ高齢化社会になってくると、どうしたって人生二毛作にならざるをえません。

一毛作目の残土をそのままにしておいたら、二毛作目をうまく始めることはできません。定年を迎えて仕事を辞めたりするときなどはまさに大きなチャンスです。

前半生のことは思い切って忘れてしまおう。うまく忘れることができれば、おそらくその人には新しい人間として生まれ変わるぐらいの大きな変化が訪れるはずですが。

そのうえで俳句作りに勤しむ。これまで生きてきた自分の人生を十分整理して、今後の二十年、三十年の人生をまったく違うものに作り上げていこうとするとき、俳句はとても有用なものだと思います。

『くりま 文藝春秋増刊 5月号』所収 外山滋比古の文章より)

(注) 呻吟……詩歌・文章などの作成に苦しむこと。

問一 — 線部① 「俳句そのものはなまけものの文芸であっても、俳句を作る者はなまけものであってはならないということなのです」とありますが、これはどのようなことですか。なぜ「なまけものの文芸」と言われるのかをふくめて説明しなさい。

問二 — 線部② 「この句は、要するに一種の価値転換を図って見方を変えれば、世の中はまったく違って見えますよ、と言っているわけです」とありますが、ここでの「価値転換」とはどのようなことですか。世間一般の考え方と比べて説明しなさい。

問三 — 線部③ 「人生を整理する」とありますが、筆者は「人生を整理する」とことと俳句づくりとをどのように関連づけていますか。どのように「人生を整理する」のかを明らかにして、百字以内で説明しなさい。

三

各文の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) イク|同音に|反対を|唱える。
- (2) 外国と|コウエキ|する。
- (3) かつての|メイユウ|に|再会する。
- (4) 実力を|測る|シキン|セキ|とする。
- (5) たくらみ|を|カン|パ|する。

二次入学試験 国語 解答用紙

受験番号

氏名

得点

問一

Blank area for question 1.

問二

Blank area for question 2.

問三

Blank area for question 3.

問四

Blank area for question 4.

問五

Blank area for question 5.

問一

Blank area for question 1.

問二

Blank area for question 2.

問三

Blank area for question 3.

問一

Vertical column with five numbered boxes (1) to (5).

このらんには  
何も書かないこと

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

⑨